

佳作

「ふんぞ」からはじまる優しめ

岡山県倉敷市立大高小学校六年 久保田 菜々

あなたは「どうぞ」の一言を言う勇氣はありますか。私は、いざ自分が言える立場になったとしても、言葉がつまる、そう思っていました。でも、私の考えは変わりました。

ある日の休日、私は友達のおかあさんと友達二人とでショッピングモールに出かけました。着いた頃にはちようどお昼時だったので、みんなでお昼ご飯を買いに行くことにしました。フードコートに行き、まず席を確保しなければと思い、みんなで手分けをして空いている席を探しました。友達と何回も見てもわかりましたが、空いている席は一つもありませんでした。「きっとどこか空いている席一つくらいならあるでしょ」と思っていた軽い気持ちは、次第に「どうしよう」という焦りの気持ちに変わっていき、席が取れずに、ただ立っているだけでも、人混みのフードコートでは邪魔になってしまいました。

なので、私と友達は一旦、席があるところから離れて、席が空くのを待つことにしました。「時間がかかっても仕方ないな……」と思っていた、その時でした。近くにいた二人の女性が声をかけてくれました。

「この席、机を拭いたら離れるので、良かったらどうぞ。」

私も友達も、

「え、いいんですか。」

と口をそろえて言うほど、とてもおどろきました。私は初めて、本やアニメに出てくる優しい人が存在することを実感しました。きっと、今後空いた席を見つけることは難しいと思ったので、お言葉に甘えてその席を使うことにしました。空想の世界では、声をかけてくれる人はたくさんいると思うけど、現実ではそう簡単には、知らない人に声をかけられなさと感じます。しかも、席が空くのを待っていた人たちは、友達や自分だけでなくきつと他にもいたと思います。そんな中で、なぜ私たちに声をかけてくれたのか、どうしてそこまで優しくしてくれるのか、いろいろ疑問がありました。その時は分からなかったけど、あとからその日のことを思い出すと、あの女性たちが考えていたことが分かるような気がし

ます。あの女性たちが、わざわざ私たちに声をかけてくれた理由。それは「人としての思いやり」の気持ちを言動で示してくれたからだと思います。私たちに席を譲る方法はきつといろいろあったと思います。机はよごれてなかったから、拭かなくても大丈夫だったし、黙って席を離れることだってできたと思います。その中でも、席が無くて困っていた私たちに、優しく声をかけることができたのは本当にすごいことだと思います。

この出来事を通して、もし自分みたいな状況に悩まされている人を見かけたら、知らない人でも、「大丈夫ですか。なにかお困りですか」と声をかけようと思いました。私も席を譲ってくれた女性たちのように、優しく話しかけられるように、心がけていこうと思います。